

2. 運動学

- 運動学 (kinematics)：【力】の概念を考慮せずに済む範囲で、質点の運動を記述
- 座標系 (3次元)：質点の位置を指定
 - 直交座標 (x, y, z) : $\mathbf{x} := xe_x + ye_y + ze_z$, $e_x := (1, 0, 0)$, $e_y := (0, 1, 0)$, $e_z := (0, 0, 1)$
 - 極座標 (r, θ, ϕ) : $\mathbf{x} := re_r$, $e_r := (\sin \theta \cos \phi, \sin \theta \sin \phi, \cos \theta)$
 - 円筒座標 (r, ϕ, z) : $\mathbf{x} := re_r + ze_z$, $e_r := (\cos \phi, \sin \phi, 0)$, $e_z := (0, 0, 1)$
- 微積分を用いた物理量の定義・対応関係
 - 変位: $\Delta \mathbf{x} := \mathbf{x}(t + \Delta t) - \mathbf{x}(t) := \int_t^{t+\Delta t} \frac{d\mathbf{v}(t')}{dt'} dt'$
 - 速度: $\mathbf{v}(t) := \frac{d\mathbf{x}(t)}{dt}$
 - 加速度: $\mathbf{a}(t) := \frac{d^2\mathbf{x}(t)}{dt^2}$
- 速度・加速度の極座標表示 (2次元、微積分で体系的に導出*1)
 - 位置ベクトル: $\mathbf{r} := re_r$, $e_r := (\cos \theta, \sin \theta)$, $e_\theta := (-\sin \theta, \cos \theta)$
 - 速度ベクトル: $\mathbf{v} := \frac{d\mathbf{r}}{dt} = v_r e_r + v_\theta e_\theta$, $v_r := \dot{r}$, $v_\theta := r\dot{\theta}$
 - 加速度ベクトル: $\mathbf{v} := \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2} = a_r e_r + a_\theta e_\theta$, $a_r := \ddot{r} - r\dot{\theta}^2$, $a_\theta := r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta}$

3. 運動の法則

- 力学の公理系 (1粒子)：運動量 $\mathbf{p} := m\mathbf{v}$ に対して、運動方程式

$$\frac{d\mathbf{p}}{dt} = \mathbf{F}(\mathbf{x}), \quad \frac{d\mathbf{x}}{dt} = \frac{\mathbf{p}}{m} \tag{1}$$

が力学の公理系をなす。常微分の解の一意性より、力学の公理系は closed な方程式系をなす*2。

- 力学の公理系 (多粒子)：複数の粒子がある時、作用・反作用の法則を課した 2体相互作用の運動方程式に従う：

$$\frac{d\mathbf{p}_i}{dt} = \sum_{j \neq i} \mathbf{F}_{ij}, \quad \frac{d\mathbf{x}_i}{dt} = \frac{\mathbf{p}_i}{m}, \quad \mathbf{F}_{ij} = -\mathbf{F}_{ji} \tag{4}$$

これで closed な方程式系をなす。

4. 運動の積分

- 運動量保存則 (作用・反作用の法則から導出される)：

$$\frac{d\mathbf{p}_1}{dt} = \mathbf{F}_{12}, \quad \frac{d\mathbf{p}_2}{dt} = \mathbf{F}_{21} = -\mathbf{F}_{12} \implies \frac{d}{dt}(\mathbf{p}_1 + \mathbf{p}_2) = 0 \tag{5}$$

- エネルギー保存則 (保存力の時)：

$$\mathbf{F}(\mathbf{x}) = -\nabla U(\mathbf{x}), \quad \nabla := \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) \implies \frac{d}{dt} \left(\frac{\mathbf{p}^2}{2m} + U(\mathbf{x}) \right) = 0. \tag{6}$$

$\mathbf{F} := (F_x, F_y, F_z)$ が保存力である必要十分条件は

$$\frac{\partial F_i}{\partial x_j} = \frac{\partial F_j}{\partial x_i} \text{ for all } i \text{ and } j. \tag{7}$$

- 角運動量保存則 (中心力の時)：

$$\mathbf{F}(\mathbf{x}) = \frac{\mathbf{r}}{r} f(r) \implies \mathbf{L} := \mathbf{r} \times \mathbf{p} = \text{const.} \tag{8}$$

- 1次元系の運動はエネルギー保存則から解が求まる：

$$\frac{m}{2} \left(\frac{dx}{dt} \right)^2 + U(x) = E \implies \pm \int \frac{dx}{\sqrt{E - U(x)}} = \sqrt{\frac{2}{m}} t + \text{const.} \tag{9}$$

*1 円筒座標でも同様のことは簡単にできる

*2 自由度に対して、方程式の数が釣り合っており、解が一意に定まっている。

- 常微分方程式の解の一意性 (数学の定理)：K次元のベクトルを考える ($\mathbf{X}(t) := (X_1(t), \dots, X_K(t))$)。常微分方程式は、初期条件 $\mathbf{X}(0)$ を与えると、(特殊なケースを除いて*3) 解が一意に定まる：

$$\frac{d\mathbf{X}}{dt} = \mathbf{f}(\mathbf{X}), \quad \mathbf{X}(0) = \mathbf{C} \implies \mathbf{X}(t) \text{ が一意に決まる} \tag{2}$$

運動方程式 (1) は $\mathbf{X} := (\mathbf{x}, \mathbf{v})$, $\mathbf{f}(\mathbf{X}) := (\mathbf{F}(\mathbf{x}), \mathbf{v})$ の形をしているため、初期条件として $\mathbf{X}(0) := (\mathbf{p}(0), \mathbf{x}(0))$ を与えると解が一意に定まる。

- 離散化して考えるとわかりやすい：次の漸化式は $\mathbf{X}_0 := \mathbf{X}(0)$ を与えると、解が自明に一意に決まる：

$$\mathbf{X}_{n+1} = \mathbf{X}_n + \mathbf{f}(\mathbf{X}_n)\Delta t, \quad \mathbf{X}_n := \mathbf{X}(n\Delta t), \quad (n = 0, 1, 2, \dots). \tag{3}$$

3～6. 具体的な問題（振動・中心力など）

- 基本的にただ運動方程式を、微分方程式の初期値問題として解けばよい。但し、運動量保存則・角運動量保存則・エネルギー保存則を用いることで、方程式の次元を下げると、問題が解きやすくなる（というより、そうじゃないと1次元運動以外は解くのは難しい）。最終的に1次元運動に帰着できると嬉しい。
- 放物運動：空気抵抗を無視した問題・大気中の線型抵抗を考慮する問題・スカイダイビングの様な非線形抵抗を考慮する問題 ⇒ ただ1階微分方程式を解けばよい。変数分離とかで解ける。
- 振動：2解線型微分方程式なので、 $x(t) = Ce^{\lambda t}$ の形を仮定して、 λ の性質を調べればよい。 $\lambda =$ 純虚数なら単振動であり、そうでない場合は減衰振動（過減衰・臨界減衰の可能性もあり）。
- 3次元系の中心力：角運動量保存則のおかげで、3次元座標 (r, θ, ϕ) での運動が、実質的に r だけにに関する1次元運動に帰着される。これを用いて解く。1次元系なので、エネルギー保存則から $r(t)$ の解が求まる。
 - 特に逆二乗則 $U(r) = -mk_s/r$ の時は Kepler の惑星の問題。解が二次曲線なのでその極座標

$$r(\theta) = \frac{l}{1 + \epsilon \cos \theta}, \quad \epsilon \text{ は離心率} \tag{10}$$

を意識して式変形すると楽。特に、 $r(t)$ の代わりに $r(\theta)$ で表示すれば、 $u(\theta) := 1/r(\theta)$ は綺麗な式になるだろう。そして逆二乗則の中心力の系では Laplace-Runge-Lenz ベクトルが保存：

$$\mathbf{M} := \frac{\mathbf{p} \times \mathbf{L}}{m} - \frac{mk_s}{r} \mathbf{r} = \text{const.} \tag{11}$$

7. 剛体の運動法則

- 剛体の自由度は6であり、重心座標 $\mathbf{r}_c := (r_x, r_y, r_z)$ と剛体の姿勢を表すオイラーの角 (θ, ϕ, ψ) が重要。
- 剛体の基礎方程式は重心の運動方程式と、重心に関する角運動量の時間発展方程式：

$$M \frac{d^2 \mathbf{r}_c}{dt^2} = \sum_i \mathbf{F}_i, \quad \frac{d\mathbf{L}'}{dt} = \sum_i \mathbf{N}'_i. \tag{12}$$

これで closed な方程式系をなす。但し、剛体を構成する質点 (m_i, \mathbf{r}_i) に対して働く力を \mathbf{F}_i と書いたとして、

$$\mathbf{r}_c := \frac{1}{M} \sum_i m_i \mathbf{r}_i, \quad M := \sum_i m_i, \quad \mathbf{N}'_i := \mathbf{r}'_i \times \mathbf{F}_i. \tag{13}$$

- 固定軸の周りの回転運動（自由度=1）では、角運動量の時間発展方程式が単純になる。慣性モーメント I を用いて

$$I \frac{d^2 \theta}{dt^2} = \sum_i N_i, \quad I := \sum_i m_i r_i^2. \tag{14}$$